

# News Letter

## JASTEC 中部支部 春季研究大会(名古屋)まとめ

過去において、これほど大きな英語改革の波が押し寄せてくることを強く実感した年はなかったのではないのでしょうか。小学校5・6年生で教科化、小学校3・4年生から外国語活動実施、中学・高校での原則オールイングリッシュで授業…。そのような激動の時代へと突き進む日本の英語教育に、様々な視点から切り込んで議論し、提案を発信していくことこそ JASTEC が担っている大きな役割の1つであると考えます。

(中部支部事務局 新井)



## 小学校英語の未来像を 見据えながら… 多彩な内容を設定しました!!

### ワークショップ①

「おすすめアクティビティと日本の英語教育私感」

発表者 Tim Frandsen (nagoyatim.com 主宰)

Tim Frandsen 氏は、長年日本で指導されているネイティブスピーカー教師の視点から、日本の英語教育のメリットやデメリットを指摘した後、いくつかのおすすめ言語活動を紹介された。

まず、氏は日本の英語教育のメリット・デメリットをあげた。メリットは日本の英語教育は、誰でも基本的な英語教育が受けることができ、自分で努力さえすれば、その結果がテストや成績として反映されることであると言う。アメリカでは日本とは違い、お金がなければよい教育が受けられない。結果的に一部の恵まれた人のみしか、教育の恩恵にあずかれないと報告された。

次にデメリットとして、知識習得や反復練習に重点が置かれ、1つの完璧な答えを求めがちな完璧主義的なところがあり、言語学習に必要な創造力が伸びないことを指摘された。また、日本人の特徴としてシャイであることも合わせ、英語教育の実が上がらないことも指摘された。さらに、英語に対する熱意、好奇心、興味を子供たちに持たせることが重要であり、これには、なにより学習者たちと良い関係を築くことが大切であると加えられた。その後、教育上の重要ポイントとして、innovation, imagination などのいくつかのキーワードを挙げた後、おすすめの手言語活動を紹介された。これらのアクティビティは子どもたちが楽しく学べ、そして退屈せずに英語に親しみを感じることができるものであった。一つのアクティビティは日本でいう「なぞなぞ」や「ダジャレ」を利用したようなものであった。例えば、ever という英単語を4つ書いて「これは何と読むでしょう」という。答えは、forever だ。ever という単語が4つ(four)、それを合わせて forever である！楽しみながら、幼稚園児からでも使えるような英単語学習ゲームである。このようにして子供たちの記憶力や創造性を刺激し、読み書きまで楽しく学ばせてしまう。子供の心理や言語習得理論に裏付けされた素晴らしいアクティビティであった。

Frandsen 氏のご指摘は日本人にとっては耳の痛い部分もあったが、誰もが同意できるものばかりであった。また、子供の能力と想像力、その成長過程の特徴に合わせて言語活動を工夫しながら考えることの大切さを教えていただいたような気がする。

(中部大学 中村圭佑・河野仁・服部滉平)

### 発表者一覧

#### ワークショップ①

Tim Frandsen

(nagoyatim.com 主宰)

#### 実践報告①

三谷みちる

(キッズインターナショナル  
スクール園長)

#### 実践報告②

矢後 智子

(名古屋市立森孝西小)

#### 研究発表

子安 恵子

(金城学院大学)

#### ワークショップ②

ロビン スキプシー

(ブリティッシュカウンシル)



# 実践報告

## 遊びを通して学び続ける子どもたち



### 実践報告①

「インターナショナルスクールは今」

発表者：三谷みちる

(キッズインターナショナルスクール園長)

～インターナショナルスクール卒園生、帰国子女にとっての小学校英語～

インターナショナルスクールとして英語教育に偏ることなく全人的教育を目指すキッズインターナショナルスクールですが、子どもたちは様々な国の人たちと交わりながら、着実に英語の力を卒園までにつけていきます。

帰国子女数は2012年に若干減少をしましたが、インターナショナルスクールは依然として増加傾向にあります。英語を母語とする子どもたちと同様の英語力を持つ児童にとって、小学校での英語活動はともすると簡単で退屈なものになってしまいがちです。教師、英語力のある児童、その他の児童、3者にとってWIN WIN WINになるように、ぜひ英語活動では英語力のある児童に手本を示してもらい、先生のアシスタント役を担わせるなど活躍の場を与えてほしいと思います。そうすることで、他の児童たちの発言の機会を減らすことなく、英語力のある児童にも発言の機会を与えることができます。英語にあまり慣れ親しんでいない児童たちにとって、少しでも多くの手本を示してもらうことが、発言の自信につながります。

コミュニケーション活動として位置づけられている小学校英語の時間が、それまで培ってきた英語の知識や能力に左右されることなく、どの子にとっても楽しく意義のあるものになることを願っています。

〈キッズインターナショナルスクール 三谷みちる〉

「インターナショナルスクール」と聞くと様々な国の子どもが通う学校、または英語を軸とした学校だと想像するが、近年ではインターナショナルスクールとは、英会話教室より時間が長く、英語習得のために通う場所という捉え方がある。愛知県にはこのようなインターナショナルスクールが35校、展開されているらしいが、現在のインターナショナルスクールではどのような教育が行われているのであろうか。キッズインターナショナルスクール園長の三谷氏が報告した。

三谷氏は主にキッズインターナショナルスクールでの取り組みについて報告された。氏によると、英語習得は重要な教育領域だが、インターナショナルスクールだからと言ってそのみを目的とするのではなく、子どもたちが安全に社会的、情緒的に認知的発達を遂げられるような、全人格的な保育を目的としているようだ。“I love me. I love you. I love the world. I'm proud of myself. I can listen to you. I can tell you. This is my choice.”を教育理念とし、自他の尊重や自立心、国際コミュニケーションの力をはぐくむことを大事に考えているとのことであった。

また、キッズインターナショナルスクールでは体験型の学習を大切に、達成感から自信に繋げているという。各クラス、英語を母語とした質の高い教師と日本人教師のチームティーチングで授業を展開し、子どもたちのニーズに合わせてプロジェクトを進めている。素晴らしい実践をビデオクリップで紹介された。ここでの日常的な共通語は英語だ。自然と子供たちが英語を使い、生き生きと活動に取り組む姿に感動したが、その背後には、先生方の工夫と日々の研修があることが明らかであった。通常の保育園より先生に対する子どもの数を少なくし、一人一人のニーズに合った教育を目指しているという。子どもの成長に合わせた言語教育と人格形成教育がきちんとされていることが感じられる発表であった。

〈中部大学 桜井咲千子〉



### 実践報告②

「チームティーチングで行う小学校4年生の絵本の活動」

発表者：矢後智子

(名古屋市立森孝西小学校 英語活動アドバイザー)

矢後智子氏は児童に学級担任とアシスタントと協力して、絵本を使って教える言語活動を、ビデオ資料を使いながら発表された。この発表では、学級担任の関わり的重要性と、絵本を扱う活動の組み立て方や指導技術の重要性を再認識させられた。主に、学級担任がどのように携わるか、絵本を使った活動のカリキュラムと学年による学習内容について語っていただいた。

まず、学級担任の携り方だが、矢後氏によると、授業での担任の先生の役割をはっきりしてもらうこと、子供の良いモデルになるよう積極的に授業に参加してもらうこと、教材や教具などの制作や準備を担任の先生にしてもらうこと、それに、授業内容の決定についても担任の先生に関わってもらうことが重要であることを指摘された。担任はクラス管理、次のアクティビティの準備、デモンストレーション、また子供と同じ目線に立ち一緒に活動をする。アシスタントは言語活動のリード役をこなし、アシスタントと担任の役割を明確にすることにより授業がスムーズに進むという。

学年による学習内容については、1年生で絵本を読みチャッツで学び動物や色を学ぶ、3年生で色や形を学び、4年生では体、動物、動作を使うなど、それぞれ学年とレディネスに合わせた絵本や教材と教授法で、学習者と向き合うことの大切さを指摘された。また、絵本を使うことにより、児童な絵本の中に用意に入りこむことができ、その中で英語を学ぶことは、言語使用の場と空間を頭の中に作り出すことであると示唆された。

漠然と can が「できる」という意味であることを教えるより、より有意味学習が成立しやすい条件を絵本が提供していると言えそうだ。

絵本を使ったカリキュラムについては、まず読み聞かせをし、英語の読み方、使用の場面、使い方を教える。次に、英語表現に慣れ親しんだ後、体を使って実際表現してみる。表現しながら読みに参加する。既習の語らいや表現を使ってゲーム、コミュニケーション活動をし、様々な方法で表現しながらさらに読み活動に参加するという流れにより児童の興味関心を引き付け進めていると言う。

アクティビティの流れとしては、全体、グループ活動、ペアワーク、個人といった形で進めていた。「はらぺこあおむし」の絵本を使い1限目は英語の言い方を知るために挨拶ゲーム、2限目は話の内容を体を使って表現させ慣れ親しませる、3限目は話の読みに参加をさせるといった具合だ。すべてを読むことはできないので子供たちは今自分が知っているキーワードや単語のわかる範囲で読んでいた。4限目は話の中で学んだ英語表現を使い新しいゲームをし、コミュニケーションをとっていた。このあたりからアクティビティが個人活動になる。5限目、これが最後の授業になり、話の中に出てきた語彙を様々な表現(ジェスチャー等)を使い読みに参加をさせていた。

授業風景をビデオで見ると、子供たちはとても楽しそうに英語を学んでいた。勉強しているというよりは遊んでいるという感覚に近かったように感じた。こういった授業を取り入れていくことで、子供たちはコミュニケーション手段としての英語を楽しく学び、英語に対する苦手意識も少なくなるだろう。このような学級担任との関係や絵本を使った学習カリキュラムにより、児童は「読めた」という達成感をもち、次の活動に繋げることができ、また学級担任が児童と一緒に反応し活動することにより、児童は安心して学習することができるのではないだろうか。小学生の英語教育が必修になり、教科書や教授法が整理された今だからこそ、こういったカリキュラムをもっと取り入れていかなければならないかもしれない。

アクティビティの流れとしては、全体、グループ活動、ペアワーク、個人といった形で進めていた。「はらぺこあおむし」の絵本を使い1限目は英語の言い方を知るために挨拶ゲーム、2限目は話の内容を体を使って表現させ慣れ親しませる、3限目は話の読みに参加をさせるといった具合だ。すべてを読むことはできないので子供たちは今自分が知っているキーワードや単語のわかる範囲で読んでいた。4限目は話の中で学んだ英語表現を使い新しいゲームをし、コミュニケーションをとっていた。このあたりからアクティビティが個人活動になる。5限目、これが最後の授業になり、話の中に出てきた語彙を様々な表現(ジェスチャー等)を使い読みに参加をさせていた。

授業風景をビデオで見ると、子供たちはとても楽しそうに英語を学んでいた。勉強しているというよりは遊んでいるという感覚に近かったように感じた。こういった授業を取り入れていくことで、子供たちはコミュニケーション手段としての英語を楽しく学び、英語に対する苦手意識も少なくなるだろう。このような学級担任との関係や絵本を使った学習カリキュラムにより、児童は「読めた」という達成感をもち、次の活動に繋げることができ、また学級担任が児童と一緒に反応し活動することにより、児童は安心して学習することができるのではないだろうか。小学生の英語教育が必修になり、教科書や教授法が整理された今だからこそ、こういったカリキュラムをもっと取り入れていかなければならないかもしれない。

〈中部大学 三宅祐未・林真佑〉

## 研究発表

### 「ネコ語もわかる？映画英語」

子安恵子(金城学院大学)



映画を使って英語を教えることをご研究されている子安恵子氏を迎えて「ネコ語もわかる？映画英語」というユニークなタイトルで、英語の授業での映画の利用の留意点についてご発表していただいた。

まず、氏は、Puss in Boots(長靴をはいた猫)を利用して、英語を使っの英語教育の留意点を語説明された。Puss in Boots は、長靴をはいたお尋ね者の猫プスの話である。幼なじみのハンプティ・ダンプティや謎の美女猫フワフワと町1番の悪党から魔法の豆を奪い取り、伝説の秘宝「金の卵」を探す冒険に挑むという話であるが、小学生が楽しく英語に触れられ、他言語への興味が高まる最適の映画である。まさにいつの間にかネコ語もわかるような気分になる。氏によると、映画利用の英語学習では、まず、年齢やレディネス、興味や目的に合わせた映画を見せることが大切であるとされた。特に、こどもにおいては、映画に興味を持ち集中することによって英語がより楽しく学べるのだ。もちろん、映画をみせるだけでは、言語習得に繋がらない。授業で映画を使うにはその映画のポイントを指摘し、所々先生が日本語を入れて説明するなど、教師自身もいろいろと工夫を凝らす必要があるとされた。

映画英語を学ぶ利点も強調されていた。一つ目は、映画を見ながら楽しく英語を学べるので、より高いモチベーションで英語を学ぶことができる、2つ目は、コンテキストがあるため、英語の使用がより有意味になり、どの状況下で、誰に対して、どういのかなど言語使用がはっきり視覚的にわかる。3つ目として、理解できなかった場合でも巻き戻すことによってそのわからなかった表現や英文法を繰り返し見て学ぶことができる。さらに適宜、日本語の字幕を利用して自己学習もできることなどを挙げた。

後半では、ドキュメンタリーを利用した英語学習についてお話された。米国文化における個人の重要性についてのフィルムであった。いくつかのシチュエーションにおいてのそれらの状況下におかれた11歳～16歳の子供たちが、それぞれ自分たちの個性を英語で表現しようとしていた。英語以外にもスペイン語、フランス語、ヘブライ語、また日本人英語、ヒスパニック英語、子供英語にも触れていた。彼らはそうしなければこれらの世界では生きては行けないとすでに自分たちの未来を見据えているようだった。言語習得論の授業でも使えるようなビデオであった。

氏は、ドキュメンタリーで英語を学ぶ利点にも触れられた。それは、画像を通して、通じて英語だけでなく、それらの土地の文化や考え、風習を理解することができる、普段の何気ない日常英会話で使う英語を学ぶことができ、本当の意味での生の英語に触れることができる、さらに、特別な状況下における多様な英語も学ぶことができる、ドキュメンタリーの刺激が、英語学習へのモチベーションを上げるなどであった。

筆者らが学校で学んできた英語と映画の中の英語とは、すこし違うかもしれない。しかし、その違いが面白いし、その難しさがチャレンジ精神をくすぐる。小学校で映画を使うことも全く可能であろう。学校教育で活かすというのは困難という意見も多いだろうが、それは教員の工夫次第であろう。子安先生は、それははっきりと示してくれた。

〈中部大学 森亘・矢田佑策〉



### ワークショップ

「The power of storytelling

- integrating stories into Elementary school English lessons

- 絵本の活用法と授業計画をワークショップを通して考える -」

発表者：ロビン・スキプシー

(ブリティッシュカウンシル)

絵本を使った効果的な学習方法とはなにか、また絵本を使った授業をするにはどのように進めていけばいいのか。ブリティッシュカウンシルのロビン・スキプシー氏が参加者を子供達と想定して、ワークショップを開いてくださった。

一般的に、教師は子供達に本を読み聴かせる場合、語彙などの言語材料を

先に教えてから本の内容に入る。単語を覚え、その発音を学び、新出する文法項目を学び、実際に本を読むといった具合だ。だが、氏の紹介した絵本を使った授業では、言語とストーリーを教えることが同時進行で行われた。

絵本は絵が書いているため子供達も単語の意味を絵から判断できるため日本語への翻訳がいらないのだ。絵で描かれていないが重要なキーワードとなる言葉がある場合は、本を読む前に歌を歌うことにより子供達の印象にその単語を残しストーリーの中でもその意味がつかめるように工夫をするという。また、本を読む前に子供たちに歌を歌わせることは本を読む前の良い準備運動となり、子供たちの本を読みたいというモチベーションをあげることもつながると言う。本を読み終わったあとは本の内容について子供達に聞くことで子供たちが本の内容を思い出す機会を作り出している。ここで子供たちに本の内容を聞く際に教師は本当に本の内容を忘れたようなフリをすることで、子供の発言したい、先生に教えてあげたいという気持ちを盛り上げるのだ。

ワークショップで使われた絵本は「hungry caterpillar」であった。絵本として読み聞かせ、わからない単語があっても辞書などを使わず絵本自体を楽しむように言われた。絵本を読む際にはジェスチャーなど、体全体を使いながら読み聞かせることにより、より子供たちが絵本の世界に入りやすいことを指摘された。授業計画では、絵本を聞くことから始まり、最終的には、児童らが自分で物語を再生し、実際にクラスメイトに発表するという内容であり、児童はかなり積極的に絵本に関わることが求められるものであった。ここまで絵本をフル活用することができるのかと驚かされた。

このワークショップを通して、筆者らは本当に子供になった気持ちで授業を体験したが、英語を勉強しているという意識はなく、物語を物語として楽しむことができた。きっと子供たちも物語がどう進んでいくのかに集中しながら、絵本を楽しむことができるであろう。しかし、その活動自体は意味内容に注目することを要求し、言語習得理論の核心を抑えていると言えよう。絵本を読み聞かせるという一見受動的な活動が、子供達の体を動かすアクティビティにつなげることで、非常に能動的で、インターアクティブな言語活動への変化していた。

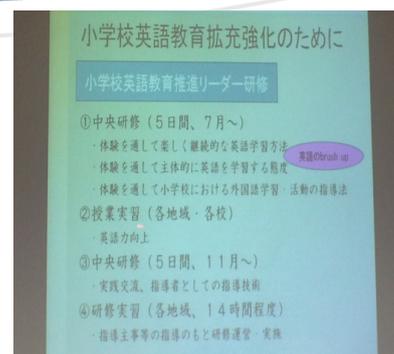
ワークショップの最後には多くの質問があり、参加者の関心の強さが伺えた。the power of storytelling を肌で感じ、絵本を使った言語活動をぜひ試してみたいと感じたのは、筆者らだけではないはずだ。

〈中部大学 阿部博文・林麻奈・早川麻央〉

# 児童英語の未来 私たちが推進したい英語教育とは…

## 全体討議

### 「児童英語教育の未来は」



司会 池田勝久(浜松市立北小学校)  
樋田禎美(一宮市立萩原中学校)

今回の研究大会の最後のプログラムは「児童英語教育の未来」についての全体討議であった。参加者全員で入学前、小学低学年、中学年、高学年などそれぞれ違う学年の教育方針でグループを作って、より効果的な英語教育について討論した。終日の研修で学んできた「私たちが推進すべき英語教育」をヒントにこれから我々が育てるべき児童・生徒像をあきらかにしようと言うことで、池田先生の話の中で全体をグループに分け「目的」「方法」「指導者」について記入した付箋紙を使いマトリクス法によりそれぞれの意見をまとめた。グループ内で3つの項目の付箋紙をコメントつきで貼っていき、すべて貼りおわってから20分間の話し合いにより、構造化し、マトリクスを完成させた。

富田は箕浦先生が率いるグループに入れていただき、小学低学年での英語教育について議論した。小学低学年の児童はまだまともに英語力を身につけていないため、スピーキング、リスニングとライティングなど全ての分野が低下しているため、より柔軟に、まず英語に興味を持たせ、意欲を芽生えさせることが大事だとした。単なる訳読形式の読書などで授業を行うと、子供がつまらないと感じ、やる気を失せることがあるので、英語のゲーム、歌などで楽しく英語を覚えさせることがポイントだろう。このグループでは先生はできればネイティブスピーカーが望ましいという結論になった。なぜなら、彼らの方がより流暢で自然に英語を操れる。子供の吸収能力は非常に高いので、それを真似して行けばより早く英語力を上達させることができるという理由である。また、早期英語教育においては、家庭内で英語教育もある程度必要であるとした。子供に英語のアニメをテレビやDVDを見せ、多量のインプットを与えること大切であるからだ。これは週に1回程度の授業ではとてもできない。さらに、基本的に小学低学年の英語教育は英語力を身につけるのではなく、子供に興味を持たせることをメインとして行うべきであるという意見も多かった。子供の英語に対するモチベーションをあげれば、おのずとその次が見えてくるからだ。

長江の参加したグループは小学校高学年の英語教育について議論した。グループの中には学生、一般企業の方、教員の方と、英語教育に対する様々な視線をもつ人がおり、たくさんの違った意見が聞けた。小学校高学年の英語教育の中でまずは楽しく、英語が好きになる事を目的にチャンツや、ネイティブスピーカーとの交流によって、英語を楽しむことが大切だという意見が多かった。だが、様々な意見があり、まとまらない部分や難しいところがあったが、質の高い議論をすることができた。

最後に他のグループの発表を聞いた。他のグループでもやはり、多様な意見がでていて、とても勉強になった。英語教育をするにあたって教える学年によって教え方や目的などが違うことが確認できた。このような熱心な先生方や研究者がいる限り、「児童英語教育の未来」は明るいものになるはずであると確信した。今、大学生となり英語学習と日々格闘して、負けてばかりの日々を送るにつけ、小さいころにこのような先生に出会いたかったと思った。

【別紙 資料参照 マトリクス表】

〈中部大学 富田暁・長江漢人〉

このNEWS LETTERをごらんになった読者の皆様より、ご意見やご感想、そして、JASTEC中部支部へのご要望などがございましたから、下記までご連絡をお寄せください。また、下記の中中部支部HPのアドレスには、これまでのNewsLetterも掲載しております。ご覧ください。

◎ JASTEC中部支部HPアドレス <http://jastec.filsa.net/>

◎ 意見・要望など [kenjia1026@ybb.ne.jp](mailto:kenjia1026@ybb.ne.jp)

JASTEC中部支部 事務局 新井謙司